

父の死 Death of Father

—チンギス・カンの前半生 その2—

2019年6月10日 改訂二版

安田公男

URL : chinggis-ff

初めに

テムジン9歳の時に父イエスゲイは亡くなった。父は部族の指導者的立場ではあったがカンにはなっていなかった。まだ若かったことに加え、タイチュート氏族との対立が大きかったようだ。父の死から成人するまでについては秘史にしか記事がなく、タイチュート氏族については集史が詳しい。史書間で内容の不均衡があり比較検討できないので、それぞれの記事を信用して考えるしかない。秘史の記事も年次順になっていないので再構成し、若干の解説を加えた後でそのように考えた理由や考察を述べた。新しい知見としては、イエスゲイが亡くなった原因を作ったチェクチェル山の麓のシラ・ケールの位置の推定ができたこと、イエスゲイとタイチュート氏族が対立した様相を明らかにできたことがある。

1. 父の死から成人するまでの再構成

1.1 イェスゲイの死

——テムジンが九歳になった時、カサル、カチウン、テムゲという弟がおり、それぞれ二歳違いであった。生まれたばかりのテムルンという妹もいた。この時、イエスゲイは妻の親族の中からテムジンの将来の嫁を決めようとテムジン連れて出かけた。チェクチェル、チクルグの山の間でコンギラト部族の氏族長であるデイ・セチェンに会った。彼はテムジンに気に入られ、娘がいるので見て欲しいと言った。ボルテという娘を見るとイエスゲイも気に入った。テムジンに婿としてデイ・セチェンに預けて帰った。途中チェクチェル山の麓のシラ・ケールでタタル部族が宴を張っているのに出会った。のどが渇いていたので立ち寄って飲み物を求めた。タタル人はかつて痛めつけられた事がある

ったので飲み物に毒を混ぜて与えた。家に帰る途中で具合が悪くなり始め、三泊りして家に着いた時には悪化し、コンゴタン氏のチャラカ翁の息子のモンリクに後の事を言い残して死んだ。――

イエスゲイがテムジンの嫁さがしにコンギラト部族まで旅行したのは、まだ若いテムジンの身体を考えると気候の良い夏から秋の初めだろう。その帰り道でのどが渇きタタル部族が宴を張っていたのに立ち寄った。彼等は馬乳酒を酌み交わしていたのだろうから、これも夏ごろを示している。イエスゲイは飲み物に毒を盛られて死んだが、集史にもカダン・タイシが毒酒を飲んで死んだとの記事がある。どんな毒なのか興味深い知識が得られない。チェックエル山は秘史の他の箇所に出て来るし他書にも名が記載されている。テムジンの行動を知るのに重要な山であるが、いまだにその位置がはっきりしないので後で考察する。父の死によりテムジンの苦難が始まるが、直前に撒いてくれた婚約と言う種が、後に彼を飛躍させる元となる。

1.2 孤立

――翌年の春、アンバカイ・カンの未亡人が祖先の祭礼を催した。参列に遅れたホエルンは未亡人たちの後ろに座らされた。食べ物も与えられない上に、皆は直ぐに移動しようとした。文句を言うホエルンとアンバカイ未亡人との間で悶着が起きた。これをきっかけに、タイチュート氏族はイエスゲイの下に集まっていた人々を自分の陣営に誘った。多くの者がタイチュートのタルグタイ・キリルトクやトドエン・ギルテに付いて行った。ホエルンは氏族民を取り戻そうと頑張ったが出来なかった。移動する民を止めようとした一家の老人チャラカは傷つけられて、テムジンは己が無力さに涙を流した。一家は冬を過ごした土地に取り残された。――

父のいない寂しい冬を越してテムジンは 10 歳になった。ホエルンは亡き夫の代理で祭礼に出かけたつもりだったのだろうが、祭礼の主催者はその資格を認めていなかったのか、あえて無視したのだろう。女の身で指導者として振る舞えるような社会でもなかっただろう。イエスゲイの下に集まった氏族民が、強いグループに従って身の安全を保とうとしたのは当然だろう。タイチュート氏族は 2 代目のカンで非業の最期を遂げたアンバカイの子孫集団であり、この後ずっと対立することになる。不思議なのはイエスゲイの兄弟たちの動向である。兄二人と弟がいたはずだが、一族の危機に際して名が出て来ないのはどうしたわけか。タイチュート氏族の有力者らしき名も、世代から考えると年令的にはイエスゲイと大きく変わらないように思える。この後に話題になる人物だけが取り上げられているのだろうか。秘史にはその辺りの事情が書かれていない。

1.3 ホエルンの苦闘

――食料が不足し、ホエルンはオノン河の河畔で食用の木の実や野草を日々集めながら子を養った。子どもたちも魚を追って食べ物を得ようとした。しかし、獲た魚をベクテル、ベルグテイ兄弟がテムジンとカサルから奪った。2 つの兄弟間で争いが起き、テムジンとカサルはベクテルを弓で殺害した。ホエルンは一家の一人が欠けたのを悲しみ兄弟の団結を説いた。――

日本であればホエルンは実家のコンギラト部族に帰って援助を受けることも考えるだろうが、その気持ちはない。実家で子を育てればコンギラト部族に所属してしまい、モンゴル部族での立場が失われることになっていたのだろうか。ベクテルの母は大事な息子を殺されたが、この事件の後も、もう一人の息子ベルグテイと共にホエルンの元を離れなかった。

以上が元朝秘史の 61 節から 78 節までの内容である。これに続く 79 節以降はテムジンがかなり成長した時のことであり、直接に結び付くのは 116 節であろう。

1.4 ジャムカとアンダになる

——テムジンとジャムカがアンダ（義兄弟）になろうと言い交わしたのは、テムジンが 11 歳の頃であった。遊び道具であるシアを交換してオノン河の氷で投げ合って遊んだ。その時にアンダとなった。翌春、弓で射あつて遊んだ時は鏑矢を交換しアンダの誓いを再び確認した。——

ホエルン家族が一族から見放された次の年の冬、ジャムカがやって来た。だが、なぜ来たのか、なぜアンダの誓いをするほどの関係になったのかについての説明がない。考えられるのは、ジャムカの家も父を亡くしていて、その母が行く末を相談するためにホエルン一家を訪れたとすることである。子供たちも将来が不安で、確かな友を求め合っていたのだろう。それからどうしたのかは、大きく飛んだ 179 節と考える。

1.5 ケレイト部族での生活

——お前は私を嫌って、父なるカンから離れさせた。我われの内、先に起きた者が父なるカンの青色の盃で馬乳酒を飲んだものだね。わしに先に起きて飲まれるのをお前は妬んだ。今はカンの青盃をいくらでも好きなだけ飲み干せ。——

チンギス・カンに登位する数年前、ジャムカの悪計でオン・カンことケレイト部族のトオリル・カンと完全に敵対することになってしまった。使者を通じてジャムカをなじっているのが上の言葉である。父なるカンの言葉と、ジャムカの感情があまり抑えられていないことからして、二人の子供時代のことをテムジンは回想していると思われる。行く末をどうすべきか考えた二つの家族はケレイト部族の元に行き、トオリル・カンに保護を願ったのだろう。その開始時期は二人が鏑矢を交換したすぐ後、即ちテムジン 12 歳の春からと判断する。二家族は今のモンゴル国の首都であるウラン・バートルを中心とした地域に移住し、トオリル・カンの下で暮らし始めた。テムジンは兄弟が多いので、長男としての責任感から母親を手伝おうと早起きするのが習慣になっていたのだろう。ジャムカは一人子だったらしいので少しわがままな性格で朝寝を楽しんでいたと思われる。仕事を早く始めた者への褒美が青色の碗で馬乳酒を飲む権利で、テムジンが優勢だった。青色の碗とは宋国で作られた青磁碗と考えられている(1)。北方草原では非常に高価なものだったものをトオリルが使わせていた事からして、二人への好意のほどが分かるというものである。ただ、15 歳で成人と見なされるからそれ以上の保護は頼めない。丸 3 年間ほど暮らしてからモンゴル部族の地に帰ったと

考えられる。成人後のテムジンとジャムカがトオリルと非常に親しかったのは、このように親子のような親密な関係で暮らしたことがあり、お互いに良い思い出となっていたからだろう。

本研究はここまでを取り上げる。この後に続くのが 79 節と考える。

2 考察

2.1 イェスゲイ死去までの経緯

父のイェスゲイが生前どのような活動をしていたのかは、成長後のテムジンに大きく影響してくるので先ず考察する。前稿でイェスゲイがホエルンを奪った時の年齢を 18 歳くらいと想像したので、テムジンが生まれた時は 19 歳か 20 歳である。数え年 9 歳であるテムジンの生まれ年が 1162 年なので、イェスゲイ死亡時の年齢は 27 歳か 28 歳、1170 年の事となる。

元朝での諡号、烈祖神元皇帝を考えると、烈は烈士の意味で正義のために死んだ人である。正義とはタタルとの戦いを意味しているのだろう。烈には気性が激しいとの意味もあり、イェスゲイの性格の一面を示しているのかもしれない。亡くなる直前は非常な有力者になっていた。集史では彼が武勇に優れタタルや金国の軍勢と戦い、クトラ・カンの死後を統治して親族の全てが彼を指導者に頂いたとある。元史では彼が諸部を合わせ権勢盛んだったとあり、秘史ではモンゴル軍を率いてケレイト部族のトオリルがカンに復帰するのを助けたとある。これらからすると、死の直前はモンゴルを二分するキヤト氏族の長にはなっており、カンではないが全モンゴル軍の司令官的立場だったと思われる。集史には出自が異なる何人かの妻がいたとあるが、知られているのは正妻のホエルンと、名が分からないもう一人だけである。こっちの方にも息子がいて、ベクテルとベルグテイといった。他の妻は、当時の風習として夫が親族の未亡人を扶養していたのだろう。

イェスゲイがモンゴル軍を率いるようになったのはクトラ・カンの死後であろうが、不思議にもどの史書もその死について触れていない。理由を隠したと考えれば敗死や自死が考えられるが想像の域を出ない。ともあれ、彼の活躍期間はイェスゲイの死の数年前で、カンに就任後六、七年間ぐらいの活動であったろう。その間に十数度の戦いがあったのだから人材と資材の消耗が激しかっただろう。モンゴル部族は生産性のあまり良くない北方に居住し、文明諸国からも遠くて交易による利益もあまり望めない。同じ遊牧生活のタタル相手に大勝できなければ得る物は少ない。戦うほど疲弊して戦争継続が難しくなって行ったのに違いない。タタルに復讐しなければならないと分かっているにもかかわらず、成果が出なければ厭戦気分が広がっただろう。一方のタタルは金国に近くて交易の利益があるし、集史ではイェスゲイが金国軍とも戦ったとあるから、タタルと共に金国軍が出動して来たのかも知れない。そうであれば彼等の力は衰えにくい。このように、モンゴルが今後の方針に悩んでいた頃に 150 節の事件があったと思われる。ケレイトのカンであったトオリルがイェスゲイを訪ねて来たのである。177 節の内容と合わせてまとめると次のようである。

——トオリルは父の死後、カン位に就いたのだがその時に兄弟を何人か殺した。それを叔父にとが

められて追われ、敵地のメルキトに逃げ込まざるを得なかった。未だ幼い娘をメルキトの坎の元に差し出して一行百人の安全を購い、友好関係にあるモンゴル部族までの通行を許してもらった。ハラウンの隘路を抜けてイエスゲイの元にやって来た。――

前報 (2) でのべたように、ハラウンの隘路とはヘンティー山脈北方の山地を通る道であろう。オノン河上流に着くので、最初にイエスゲイの元にたどり着き助力を依頼したはずだ。ケレイトとまともな戦闘になれば勝てる見込みはないとイエスゲイも思っただろうが、トオリル支援を決めた。恐らくグル・カンの評判が落ち、トオリルの復帰を待望する声が聞こえて来のだろう。グル・カンと名乗ったくらいだから尊大な態度を示して嫌われたのかも知れない。力の落ちているモンゴル軍ではあるが勝てる戦いとイエスゲイは読み、トオリルを立てて進軍した。抵抗はあまりなかったようで、グル・カンは西夏方面へ逃げ出し、以後行方は知られていない。

イエスゲイは作戦を成功させ、トオリルに貸しを作った。タタル戦が停滞していたことによって起きていた部族の沈滞感をいくらかでもぬぐいさることができただろう。声望は更に高まり、無事であれば次期のカンとなっていたであろう。これらの事を死の年の前年とすれば、イエスゲイは 26 歳か 27 歳だったことになる。翌年息子の嫁探しに行き、死に繋がる事件があったと考える。そうなった原因としては、捕虜の交換などでタタル部民と顔を合わす機会があり、顔も知られていたであろうが、前報で触れたように、ホエルン強奪の件で染みついた悪名があったと思われる (2)。イエスゲイは油断していたと言われても仕方がない。

2.2 結婚当初のホエルンの思い

イエスゲイはホエルンを暴力で奪ったが、テムジンの嫁を探すのに妻の部族まで行こうとしていたことから考えて、その里との関係は完全に修復されていたものと思われる。恐らくホエルン強奪事件の後、イエスゲイの父親のバルタン・バートル本人か、その使いがコンギラトまで行って正式な結婚の許可を得ていたと思われる。その後のイエスゲイの出世とそれを助けるホエルンの有能さを聞いて、ホエルンの里も喜んでいたのであろう。

しかし、結婚した頃はホエルンの心が傷つかなかったはずがない。しかも直ぐに子を産むことになり、女の業のようなものを感じただろう。社会の矛盾が自分一人にのしかかってきたような気がして悲しかったのに違いない。だが、息子を生んだ時、夫が初陣で大戦果を上げて帰って来た。続く戦いの中でイエスゲイは出世して行く。ホエルンもイエスゲイが夫であることをどこかの時点で認めたのに違いない。イエスゲイはもう一人の妻と二人の男の子をもうけたのにその後はいなかった。だが、ホエルンとは続けて子が生まれた。結婚後数年でイエスゲイの愛はもっぱらホエルンに移ったようだ。一緒に居て安心できる女性でもあったのだろう。もう一人の妻とは子が二人に止まっているのを考えると、かなり年上だった可能性もある。ホエルンは妊娠中が多く、輜重部隊として戦いに同行できない事が多かっただろうが、夫のいない後をしっかりとまとめ、戦いに必要な資材の準備なども上手くやっていたのだろう。イエスゲイは自分の戦いがうまく行くのも、妻のおかげだと思っていたのに違いない。集史にはホエルンが聡明で、部族民の世話を良くしたとある。こ

の後の秘史の内容からしても過大評価ではない。

指導力に優れ若くして次のモンゴル部族のカンに間違いなし、というところまで登りつめた夫をホエルンは誇らしく思っていただろう。無理やりの結婚だが神の定めた特別のものだった、と自分を納得させていたのではなかろうか。その矢先の突然の死である。しかも5人の子どもは未だ幼い。泣くに泣けない気持ちだっただろう。が、直ぐに夫が残した部民を自分で守りぬこうとの気持ちに変わっただろう。秋から翌年春まで、イエスゲイの集めた民をホエルンはまとめていたと思われる。しかし、イエスゲイの兄弟には長兄のモンゲトゥ・キヤン、次兄のネクン・タイシ、弟のダリダイ・オッチギンがいた。跡目を誰が継承するのかの話し合いが冬の間活発に行われたのに違いない。その中で力を持ったのはネクン・タイシではなかったか。集史には彼がタイチュートに従ったとあるからである。イエスゲイの残した民がタイチュートに従ったとあるのも、実際はネクン・タイシに付いて行ったのであろう。当時の風習として、未亡人は一族の男が妻として扶養する習慣であった。有能で部民に慕われているホエルンを妻にすれば、弟が残したものがそのまま手に入るとネクンは考えたのに違いない。しかし、ホエルンはイエスゲイ以外の男を主人にする気持ちがなかったのだろう。彼との結びつきは神の思し召しと思って夫の兄弟の世話になることを拒否し、息子が成人するまでの間イエスゲイ代行として生きて行こうとしたのだろう。だが春になってホエルンたちはペンデル付近に取り残された。強い力が働いたと思うが、それは後で考察する。一緒にもう一人の妻がホエルンの元に残ったことは確かであるが、他にどの程度の人かいたのかは分からない。ホエルンに同情した数家族がいた可能性はある。

2.3 イェスゲイ死後のホエルンの悩み

ホエルンはオノン河周辺に留まり子を育てようとしたが、直ぐに行き詰まりを感じたはずだ。子ども同士の深刻な争いもあったが、それ以上に困るのは子どもたちが一般社会を知らずに育ってしまうことだ。男の子が多いのに、成人男性が行う日常生活や戦の準備などを見聞きする機会が限られている。子どもたちが、部族の中心から外れた所に住んでいて、女子供とわずかの家族だけで暮らしても人物として全く成長できない、と強く思っただろう。戦いの技も学ばせなければならないが到底できない。成人男子が大勢いる社会を経験させる必要がある。それも夫のように部族の上に立つ人物の下で、日々の活発な活動を見聞きし体験させなければ、子どもたちが大きく成長できないと思っただろう。この時トオリルの助けを借りようと思っただろう。ホエルンはそこに行って子どもたちを男にすると決めた。ジャムカの母親もホエルンと同じ考えだった。ジャムカが受け入れられたのは、ひょっとしたら、その父親がトオリル救援作戦の折の戦死者の一人だったのかもしれない。二人の母親とも子どもを首都へ留学させるような気持ちだったのだろう。トオリルの性格は直ぐ下の弟達を殺してカン位を奪ったように情け容赦のない面もあったが、自分を助けてくれた男のまだ幼い息子たちに対しては青磁碗を使わせるほど優しくかった。その評判が周囲に伝われば、恩義に報いる人情の篤いカンとして名声が上がるとの打算があったかのもかもしれない。トオリルの息子のセングムはまだ5、6歳と想像されるので、遊び相手にもなっただろう。ケレイテイ、後にジャカ・ガンボの名で知られるトオリルの実の弟もいた。年令はテムジンより少し年上であろうが、

友達付き合いをして暮らしたのだろう。モンゴリアの中心とも言えるケレイト部族には漢土や西方からの商人や物資も集まっており、奥地のビンデルには見聞きできないものが多かっただろう。戦いがあつたとすれば、その下働き程度で参加した可能性もある。貴重な3年間を暮らしてテムジンとジャムカは本当の男になった。トオリルに感謝していたのに違いない。数十年後、三者の間で激しい葛藤が始まるとは想像もしていなかっただろう。

2.4 もう一人の妻

イエスゲイはこの女の方とは2人の男の子をもうけた。テムジン兄弟がベクテル兄弟に魚を奪われたことからして、相手の方が少しだけ年上で力が強かったようだ。10歳くらいで1年以上年令が違ふと体力も知力も絶対的な差になり、テムジン達は対抗できなかつただろう。そう考えると、もう一人の妻の方が少し先に家に入っていたように思う。しかし、身分の高いホエルンが正妻となり実力もあるのが分かると、自分が下であることを自然に受け入れたのだろう。この女は、後のボルテ誘拐事件まで一緒にいたことが分かる。息子の一人を殺されてもホエルンに付いて行ったのはよく考えるとすごい事である。イエスゲイの兄弟の庇護下に入るのが通常の女の生き方であり、そうしようと思えば出来たはずである。それでもホエルンに付いて行ったのは、心服していたからとしか考えられない。競争相手である女を自然に従わせるのだから、ホエルンの才能、人格のほどが分かるというものである。ただの想像であるが、タタル部族とかケレイト部族のような名のある部族出身ではなく、山岳部に住むウリャンハイ部族出身ではないかと思う。この女は、テムジンの妻ボルテがメルキトに誘拐された時に一緒にさらわれ、その後メルキト人の妻となってその地で暮らしたようだ。

2.5 イェスゲイの兄弟

イエスゲイの弟のダリダイ・オッチギンはテムジンが活躍する時期まで健在であった。有能であればイエスゲイに代わってキヤトの頭になれたのだが、そのような動きはない。当時、夫を失った一家を支えるために、その夫人を夫の兄弟が妻として迎え入れることが普通だった。レビラト婚の用語で呼ばれる。末弟を表すオッチギン、即ち竈の主人が父母の面倒をみて家を継ぐ。直ぐ上の兄が死んだのだから、ダリダイもホエルンを妻の一人に組み入れようとしたことは大いに考えられる。だが、後のダリダイの行動を考えると思慮深い人物ではないから、聡明なホエルンが嫌ったとして不思議はない。集史によると、長男のモンゲトゥ・キヤンの子孫はチンギス・カンにずっと協力して一族は栄えたとある。だが、この時点でホエルンたちを守ろうとしたかどうかは分からない。二男のネクン・タイシはタイチュートに従い、森林地方を牧地としたという。既に述べたように、ネクンがタイチュートに従ったので、イエスゲイの集めた民も彼に従ったと思われる。その子クチャルはテムジンが実力を付けると従っていたが、ウルクイ・シルケルジトにいたタタル戦での行動を叱責されて離反しジャムカとオン・カン陣営に移った。集史には、ナイマンのタヤン・カンに従った後で殺害されたとある。

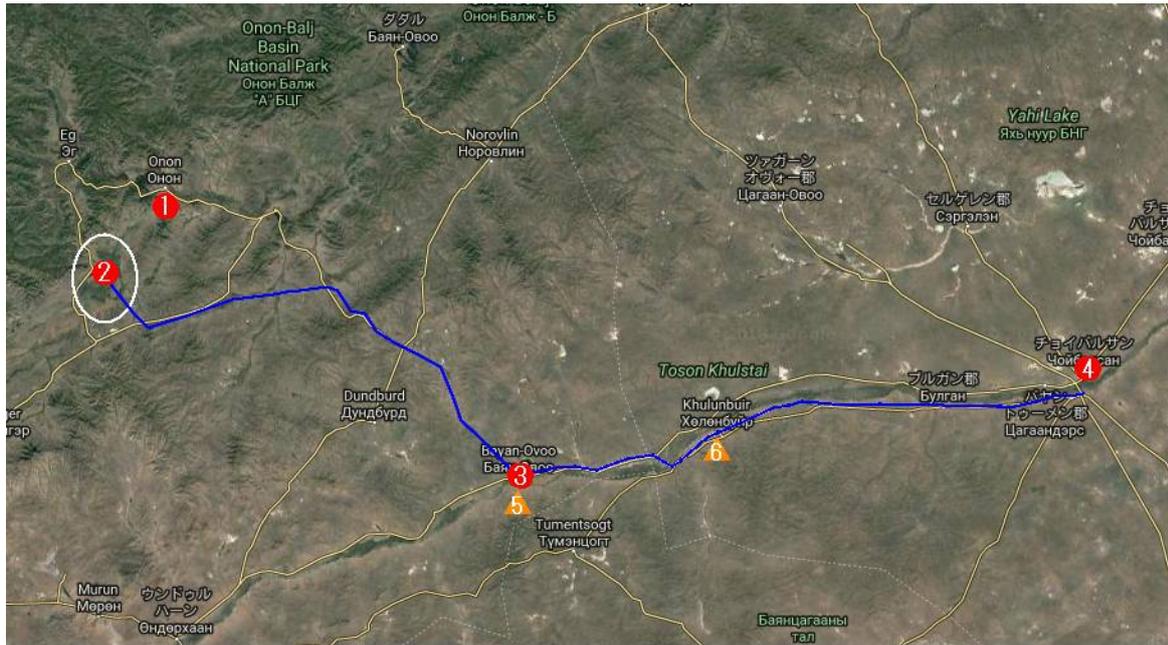
2.6 チェクチェル山とその麓のシラ・ケール

山の名は秘史の他の個所や別の史書でも数度出て来て、後のテムジンの行動を推測するのにも重要な山である。ペルレーはホロンバイル地方に位置を想定している(3)。であれば、低い丘の様な山が想像されるが、見つかったという報告はない

イエスゲイの行動を推測するには、先ず帰ろうとしていたその本拠地の位置を設定しなければならない。前報で述べたように、イエスゲイの本拠地は旧ビンデル付近の可能性が高いが、これは冬営地であろう。夏の季節はそこより南西に伸びたホルホ河沿いの平原か、東に伸びるオノン河沿いで遊牧していたと思われる。この後、イエスゲイの属するキヤト氏族がケルレン河方面へ南下して行く傾向からすると、ホルホ河沿いの平原にいたのではなかろうか。平野の西には、「ビンデルのカン山」というのがあるし、秘史にモンゴル部族の聖地のように描かれるゴルゴナク河原をホルホ河に当てる説もあるからである。東西は広い所で約 15km、南北はビンデルから計算して約 50km の平野である。現在平野の南部に農地が広がっていることからみて、植生の豊かな土地と思われる。イエスゲイの夏の家をその中心部付近の河の側の地点 (48.40N110.40E、図 1) と置いた。彼がテムジンの嫁取りに出かけたコンギラト部族はフルン湖東方が主な居住地域であったので、そこへ向かう交通路はケルレン河沿いの道で移動は騎馬に違である。筆者の研究から、騎馬による長距離移動時の平均移動速度は 50~60km/d であり、稀に 90km/d であった(4)。ただし、これは 70 歳過ぎの真人を含む漢人一行の速度だから、季節が良い時でモンゴル人青壮年ならばもう少し早かっただろう。三泊りして自分の家に帰り着いたとあるのを、3.5 から 4 日と理解すると、最高速度 90km/d だったとして 315km から 360km の移動距離となる。タタル部族の居住範囲はケルレン河の南までと考えられるから、河の南をしばらく通っていたはずだ。自宅に向かって方角を北に変える地点は現在のバヤン・オボーであろうから、その辺りまで河の南岸を通っていたのではなかろうか。南岸からどこで河を渡ったかについては、幾本もの通行痕が見えるバヤン・オボー辺りとしても良いし、その東 50km に道路表示(47.82N112.76E)があるので、そこで河を渡ったとしても良い。こちらの行程が少し短くなるので、ここで北岸に渡ったとして GMap 上で経路を探し、イエスゲイの帰路を想定して図 1 に示した。本拠地からの移動可能最大距離 360km は現在のチョイバルサンあたりである。この想定路付近にチェクチェル山とシラ・ケールがあることになる。

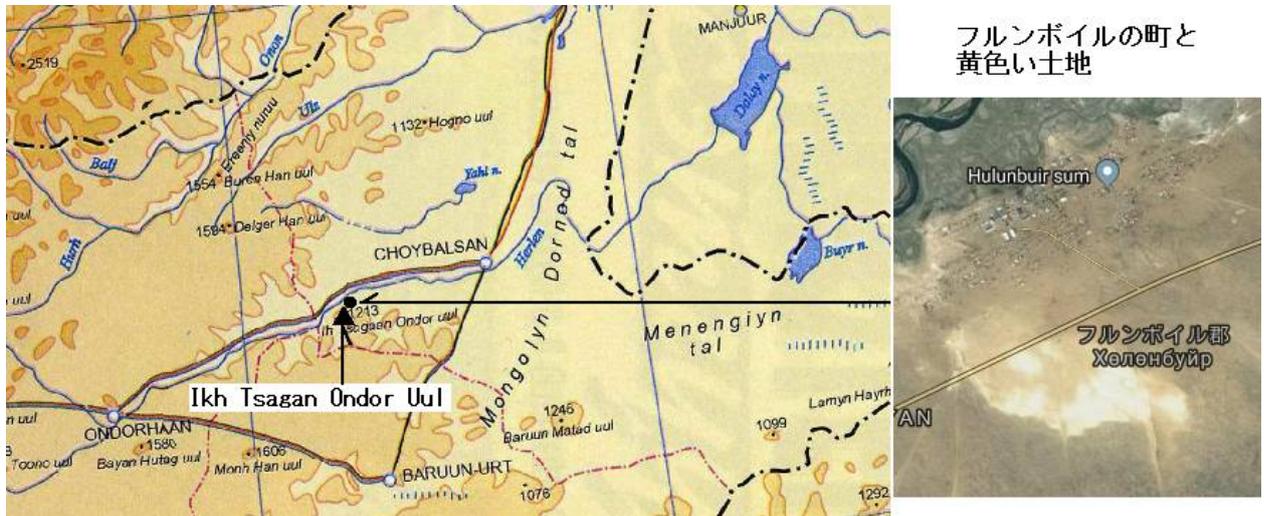
この経路の近くで目立つ山を探すと、バヤン・オボーの対岸にあるハル・ヤマート自然保護区のどれかの山か、イフ・ツァガン・オンドル山の二つしかない(図 2)。渡河点も考えると、周りに高い山がなく旅のよい目標になるイフ・ツァガン・オンドル山 (47.72N112.09E) がチェクチェル山の候補である。ちなみに、この山の海拔高度は 1,213m で、地表からの高さは 400m ほどである。秘史の後節にはこの山が敵軍を見張る場所か連絡地点かに定められたとの記述がある。低い丘のような山ではなく、ある程度の高さのある見通しの良い山であったはずだ。この山がチェクチェル山である可能性を後押しするものである。更にそれを強く裏付けるのは、北 6km にあるフルンブイルという町である。図 2 に見るように、その辺りの土地の色は明るい黄色であり、近くに同じような色の場所はない。ここが黄色の原、即ちシラ・ケールであったと判断できる。ここから 2 のイエスゲイの本拠推定地まで 250km あるので、イエスゲイは 60~70km/d の速度で帰ったことになる。

図1 イェスゲイの想定帰路



- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 旧ビンデル | 5 ハル・ヤマート自然保護区 |
| 2 ホルホ河平野(イエスゲイの家想定地) | 6 イフ・ツァガン・オンドル山 |
| 3 バヤン・オボ | 青線：イエスゲイの推定帰路 |
| 4 チョイバルサン(2より360km地点) | |

図2 イフ・ツァガン・オンドル山とフルンボイル町



以上の推論にはイエスゲイの本拠地の位置が不確実という難点がある。だが、想定位置をいくらか変えたところで結論は大きく変えようがない。上図(5)を見ても、ケルレン河沿いの帰路近くにはイフ・ツァガン・オンドル山以外に目立つ山がなく、シラ・ケールにふさわしい土地も見当たらないからである。この山とよく一緒に出て来るチクルグ山はチェックチェル山に近い所にある山のようなイメージであったが、ここから東方向にはそれらしい高い山がない。全く新しい観点からチクルグ山を探す必要がある。デイ・セチェンがいたというこれら二つの山の間についても同様である。

2.7 タイチュート氏族の動向

テムジン(チンギス・カン)はモンゴル部族のカンであったが、長く部族の半分しか治められなかった。タイチュート氏族統合までに時間が掛かったからである。彼らを併合したのは1200年、チンギス・カンに即位する6年前である。対立の元は父の時代に遡る。元史と親征録にはイエスゲイとタルグタイ・キリルトクとは元々仲が悪くなかったが、後に感情的なもつれが生じて交際を断ったように書かれている。集史にはイエスゲイをタイチュートが嫉妬していたともある。それらがテムジンの代に及んだようだ。イエスゲイとの対立の原因は政策の違いもあっただろうが、性格から来るものもあると思う。秘史149節に、馬にも乗れないタルグタイとの表現がある。かなり太っていたか、脚が悪かったかである。この通りだったとすると、戦いなどは勿論、日常の牧畜作業や狩りなどの娯楽もあまりしていなかっただろう。青年時代にもその傾向があったとすれば、活動的なイエスゲイとはそりが合わなかっただろう。彼等の動向を知るには集史の記事が参考になる。

——アンバカイの死後、タイチュート氏族の主だった者たちが集まって自分たちの指導者を選ぶとした。会議はしばらく続いたが、誰とも決めることができなかった。カダン・タイシはケレイトのグル・カン・カンの所に行き十日滞在した。帰り際に酒を一甕もらったので皆で飲んだ。部下は全員吐き出したが、カダンは飲んだ。部下は異常なかったが、彼は病気になって翌春に死んだ。秋になってタイチュートの首領たちは又集まって誰を指導者にすべきか話しあった。トドル・ビルゲ、タルグタイ・キリルトク、彼はアダル・カンの息子である。マトクン・セチェンなどが話しあったが、やはり決められなかった。ただし、チンギス・カンの時代に敵対していたのは、アダル・カンの息子であるタルグタイ・キリルトク、トダイ(?)、クリル・バートル、アंकハクチュラであった。中でもタルグタイ・キリルトクに最も力があり、実質的な指導者だった。——

最初の会議はアンバカイの死後には違いないが、クトラ・カンが死んだ後とするのがより正しいだろう。アンバカイは自分の三男のカダン・タイシに復讐戦をまかせるとの遺言をしていたので、アンバカイの死後は彼がタイチュートのリーダーだったはずだ。クトラが死んだので、次期のカン候補含みでタイチュート氏族の代表を改めて選ぶとしたのだろう。恐らく、カダン・タイシはタタル戦がうまく行っていない理由で固辞し、決められなかったのだろう。その後、彼はケレイト部族に行ってグル・カン・カンに会い毒酒を贈られる。だが、何の目的で行ったのか、なぜ毒酒を贈られたのかについての説明がない。想像すれば、モンゴル部族単独では実行が難しくなったタタル戦にケレイトの力を貸してもらい、一気に決着をつけようとの依頼ではなかっただろうか。グル・カン、即ち「大きなカン」と名乗ったくらいだから、そのくらいの野望を持っていても不思議ではないとカダンは思ったのだろう。しかし、案に相違してグル・カンにその気持ちが全くなく、感情的なもつれが生じて毒酒の贈り物になったのだろう。その時点でトオリルがモンゴルに亡命して来ていたとすれば、その扱いをめぐる言い争いがあったのかも知れない。贈られた毒酒を飲んでカダンの部下が全員吐き出したのは味の異常がはっきりしていたからだろう。そんな酒と分かって贈ったのだから、飲んでもらえるとはグル・カン自身も初めから思っていなかったのに違いない。カダン

の意向を拒否する自分の気持ちを、毒酒で念押ししたまでだろう。では、なぜカダンだけが飲んだのだろう。憶測だが、最後の頼みのケレイトに断られ、亡父の遺言にもかかわらずタタル戦を進展させられないことを憂いて死にたかったように見える。

年を越して春にカダンが亡くなった。それから半年経った2回目の会議でもタイチュートは彼に代わるリーダー格を決められなかった。グル・カンの仕打ちは気に食わなかったはずだが、一戦交えるどころか文句の一つも言いに行こうとする雰囲気にもなっていなかったのだろう。恐らく彼等の腹の中では、タタル戦も含めどんな戦いもこれ以上続けたくないとの思いが強まっていたのではなかろうか。イエスゲイはあきれ腹立たしかっただろう。この辺でタイチュートとの齟齬が決定的になったのだろう。その後、イエスゲイは軍勢を催してトオリルを助け、グル・カンを追いだした。秘史177節には、その時クナンとバカジの二人のタイチュートの民を連れていったと書かれている。なぜその名がわざわざ出て来るのか理由が分からなかったが、以上のような経緯であったとすると、彼らにカダンの仇討ちをさせる意味が含まれていたのだったと理解出来る。もしも、先の二人以外のタイチュートの民が戦いに付いて行かなかったとすれば、トオリルを復位させたイエスゲイに全く頭が上がらなくなっただろう。却ってその成功を妬んだ可能性が大いにある。

2.8 アダル・カンとタルグタイ

2回目の会議でタルグタイはかなりの実力者であったように書かれている。ただし、「アダル・カンの息子の」という但し書き付きである。彼が父あってこそその存在であったのを示しており、まだ実力が伴っていなかった証拠である。ここで不思議に思うのは、アダル・カンという名前である。カンとは勝手に名乗れるような称号ではない。まだキヤトとの氏族対立はない時期であるので、タイチュート氏族内だけのカンだったとするのは難しい。クトラ・カンの後を一時的にでも継いでいた様子もない。その息子のタルグタイの名が上の引用文に三度出てくるが、二度も、父の名が強調されている理由を考えて見たい。なお、アダルはアンバカイの長男で、カダンは三男であった。

タルグタイの権力の程度を考えるには年齢が一つの目安になるが、それには先ず彼の祖父のアンバカイの年令から推測する必要がある。彼が嫁に入れる娘を持っていたことと現役の軍司令官であるカンであったこと、更に当時寿命が短かったことからすると、アンバカイが死んだ時は40歳から55歳の範囲だっただろう。アンバカイの長男であるアダルは、イエスゲイとテムジンの年令関係にならうと、当時20歳から35歳くらいになる。アンバカイ死亡時から9年でイエスゲイ死去であるから、その時点でアダルは29歳から44歳となる。その又長男（親征録では次男）がタルグタイだから、アダル29歳ならば10歳くらいにしかならず、この年齢ではあり得ない。アダル44歳であったとすれば、タルグタイは25歳となる。単なる推測だが、アンバカイは55歳頃に亡くなったのではないか。イエスゲイが亡くなった時のアダルは45歳前後、タルグタイは25歳前後と考える。イエスゲイと衝突したことを思えば、同い年くらいかも知れない。

タルグタイはまだ充分な権力を持たず父の威光の下で動いていたと考えられる。とすれば、アダルについているカンは正真正銘のモンゴルの部族長としての称号であったのだろう。ただし、カンになったとしてもイエスゲイ存命時の就任はありえない。なつたとすればその死の翌年の春、ホエ

ルンとアンバカイ未亡人との揉め事があった時だったと考える。カダン・タイシが死に、イエスゲイも前年に死んだ。武人派の大物がいなくなり、穏健派が主流を占めたのだろう。前のカンがキヤト氏族のクトラだったので、タイチュート氏族最年長のアダルが無難としてカンに選ばれ、タタル戦を見合わせて部族の力を蓄える方針に変わったのだろう。イエスゲイがタルグタイと対立していたといっても個人的なことで、イエスゲイの兄のネクンがタイチュートに従ったという集史の記事からも、この時点での氏族対立はなかったとみられる。こういう決定があったので、イエスゲイの下に集まっていた氏族民は、タイチュートというよりアダル・カンを認めたネクンたちの指揮下に入ったのだろう。従わなかったホエルンたちの方が反逆者の立場であった。

この辺りの経緯が史書に詳しく書かれていないのは、チンギス・カン側を正統とする立場に反するからだろう。アダルなんて本当のカンではない、本来ならばチンギス・カンの父であるイエスゲイがその地位に就いていたはずだ、との思いが強いのではなかろうか。タルグタイ・キリルトクは父の手先となって権力を振り、父の死後は対立者筆頭となったので、アダルの名で行われていたことまで、「アダル・カンの息子のタルグタイ・キリルトク」と書き換えられた部分があるように思う。

9 まとめ

秘史の記事には、例えばクイテンの戦いのように信頼できない部分がある。ただし、今回取り上げたテムジンの少年期の事や父イエスゲイの行動などは秘史にしかない記事であるので他書の記事と比較して正誤を確かめられない。集史には父の死をテムジン 13 歳の時とする記事があるがその前後の情報がない。どちらを信じるかと言えば、テムジンの成長過程がうかがえる秘史の方である。内部矛盾があるかどうかを検証して正確性を確認する必要があるが、今回、秘史の記事通りに探索して、従来ホロンバイル地方にあると思われて来たチェクチェル山とその麓のシラ・ケールの有力候補地が見出せた。この部分に関する秘史の信頼性を高めるものである。ただし、集史の記事にもタイチュート氏族の記事のように大いに参考になる部分があった。秘史と併せて読むことでイエスゲイとタイチュート氏族との対立の様相がよく理解でき、テムジンとタイチュートとの対立も父親のイエスゲイの時代に遡ることが明らかになった。敵氏族であったタイチュートに関する記事が、なぜ遠い中東で成立した集史に残っていたのか興味深く、その面の識者に検討してもらいたい。このように秘史と集史には相互補完的な面もある。今回チェクチェル山とその麓のシラ・ケールの位置を推定できたが、あくまで文献と地図上でのことであるので、実際に現地を見ることや、この山と共によく出て来るチクルグ山の位置、またデイ・セチェンがいたというそれらの山の間での推定と併せて総合的に考える必要がある。この部分は後に稿を改めて述べたい。研究部分の年表を作成したので添付する。

表1 チンギス・カンの幼年期から成人するまでの推定年表

| 年 月 | | 出 来 事 |
|-----------------|-----------------|---|
| 1162年 | 11月 | テムジン誕生 |
| 1166年? | | クトラ・カン死去 |
| 1166年 | | ケレイト部族のトオリル・カンは叔父に地位を奪われ、メルキトに逃亡。叔父はグル・カンと名乗る。 |
| 1168年 | 秋 | トオリルがイエスゲイの元に亡命して来る。 |
| | 秋-冬 | カダン・タイシはケレイトのグル・カンの所に赴きタタルへの共同作戦を提案。だが断られた上に毒酒を贈られる。 |
| 1169年 | 春 | 毒酒が原因でカダン・タイシ死去。 |
| | 夏-秋 | イエスゲイ、トオリルを助けてケレイトに進撃。トオリルのカン位への復帰を助け、彼とアンダの約を交わす。 |
| 1170年 | テムジン 9 歳 夏~秋 | イエスゲイはテムジンの嫁を探しに東に出かけ、デイ・セチェンと会いその娘ボルテに決める。帰路、チェクチェル山の麓のシラ・ケールでタタル部族に毒入りの飲み物を与えられて死亡。 |
| 1171年 | テムジン 10 歳 春 | モンゴル部族は新しいカンにアダルを決める。イエスゲイの下に集まっていた民はその決定に従い、ホエルンから離反。 |
| 1172年 | テムジン 11 歳 夏 | テムジン、カサル兄弟とベクテル、ベルグテイ兄弟の喧嘩が起き、ベクテルが矢で射られて死亡。 |
| | 冬 | ジャムカ親子が来て相談し、ケレイトへ保護を求めに行くことにする。テムジンはジャムカとアンダの契りを交わす。 |
| 1172年 | テムジン 12 歳 春 | ジャムカと再度アンダの契りを交わす。 二つの家族はケレイト部族に向けて移動。庇護下に入る。 |
| 1172年~ 1175年 | 春 | トオリル・カンの手伝いをしながら生活し、社会を勉強する。 |
| 1175年 | テムジン 15 歳 | テムジン、ジャムカは成人に達しケレイトを離れる。テムジン一家はビンデル付近に戻ろうとする。 |

1 1 参考文献

<史料>

- 『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房，東京
 : 村上正二(1970)「モンゴル秘史 1, 2, 3」平凡社，東京
 『集史』:『史集』(1983)，商務印書館，北京
 : ドーソン著，佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史 1」平凡社，東京

『元史』宋濂編：「元史」（1976）中華書局，北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版（1910），国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<研究書ほか>

- (1) 白石典之氏の著作
- (2) 安田公男(2018)「チンギス・カンの前半生その1 テムジン誕生す」4-7頁，HP チンギス・カンとその友人たち（chinggis-ff.jp）
- (3) ハー・ペルレー「元朝秘史に表れる地・水名を探る」小沢重男著「元朝秘史全訳」の付録
- (4) 安田公男(2017)「長春真人の旅」27頁，HP チンギス・カンとその友人たち（chinggis-ff.jp）
- (5) <http://www.vidiani.com/large-detailed-physical-map-of-mongolia/>

以上

改訂履歴

2018年10月30日 初版

2019年6月10日 改訂二版 秘史の原文引用が正確でない部分があったので正した。
その他にも正確を期して部分的に書き改めた。